

牛久：学校周辺に見る自然

第56号 ひたち野うしく小（ひたち野西近隣公園）

2011年11月29日発行

＜ 秋の水辺公園、生きものたちの冬越し準備 ～6. 虫たちの冬越し・チョウの場合 ＞

11/8、ひたち野うしく小4年生との水辺公園、秋の生きもの観察。今回は、虫たちの冬越しから、チョウの仲間について。チョウの場合、成体のまま冬を越すのは、やはり厳しく、幼虫で落ち葉や草の根もとにもぐりこんだり、さなぎや卵で「休眠（きゅうみん）」して越冬するものが大部分です。休眠とは、わずかに呼吸するだけで、活動をほとんど停止した状態をいいます。



↑後ろのメスの行く手をさえぎり、いつも前を飛んで求愛するモンキチョウのオス。

このモンキチョウは、幼虫で冬を越します。早春から飛んでいるのは、そのためでしょう。オスがしきりに求愛（きゅうあい）をしていました。どちらがオスか分かりますか？観察していると、写真のように、いつも黄色い方が前にいます。後ろの白いのに追いかけているように見えますが、じつは、後のメスを通せんぼしながら、黄色いオスが常に前を飛び、求愛しているのです。←モンキチョウが2頭います。どこにいるか、分かりますか？





同じシロチョウ科ですが、おなじみのモンシロチョウは、さなぎで冬を越します。幼虫と違って乾燥の心配がないので、結構いろいろなところにさなぎをつくりませんが、家の壁など目につきやすいところでは、さなぎになる前に、アオムシコマユバチなどの寄生バチに卵を産みつけられてしまうこともあります。

←カタバミのみつを吸うモンシロチョウ。



↑ はねを休めるヤマトシジミ。幼虫で冬を越します。左ははねを開いたところ。右ははねを閉じて裏が見えている。

上のヤマトシジミも、幼虫越冬。えさとなるカタバミの根もとにもぐって、冬でも暖かい日には出てきて、葉を食べ、少しずつ成長していきます。



こちらのウラギンシジミは、成虫のまま冬を越します。成虫越冬の場合、キチョウやリタテハなどのように、見つかりにくいところでじっとしているものが多いですが、このチョウは例外で、わりと目につきやすいところにも動かずじっとしています。チョウは花のみつを吸うというイメージがありますが、このチョウは獣糞や、腐った果物の汁を吸い、人の手にとまらせると汗も吸うそうです。

←コナラの葉の上で、はねを休めるウラギンシジミ。



最後にヒメアカタテハ。45号でも紹介しているように、夏から秋にかけて南の温暖な地域から北上してきますが、寒さに弱く、この辺では冬を越せずに死んでしまうようです。ただし、東京では真冬に成虫を見たとか、幼虫で越冬していたとかいう話も聞きますので、もしかしたら牛久でも、そのようなのがいるかもしれません。南の地域では、幼虫で越冬するそうです。【理科支援員 宮内】

↑ この辺で見られるのは、せいぜい11月いっぱいくらいといわれるヒメアカタテハ。